

「イエスの約束」

聖書の箇所：ヨハネ福音書 17：20～26

<導 入>

「交響曲の父」と呼ばれたハイドンは、18世紀に活躍したオーストリアの作曲家です。彼は、生涯で100曲以上の交響曲を作曲しました。ハイドンについて、次のような話があります。「ハイドンがかつて仲間の芸術家たちと一緒にいた時、そのうちの一人が彼に質問しました。『非常な努力によって力を出し尽くしたとき、内なる力を最も早く回復させるのは、どうしたらよいのでしょうか』。ハイドンは言いました。『私の家には小さな礼拝堂があります。仕事に疲れると、私はそこに入って祈るのです。この方法が成功しなかったことは、今まで一度もありません』。私たちは神様に祈ることによって、信仰者として生きる力を得ます。祈りは、信仰の道を歩む力の源です。アンネ・ホワイトの詩（一部抜粋）です。

「私は神にお会いする 御足に油を注ぐ私を 彼は愛のうちに抱きしめてくださる 私は神にお会いする その祈りの場所に行く私を引き止めないでほしい なぜなら、彼がそこで私の手をしっかりと握られるから 私は神にお会いする そして、私は知るのだ その会合の時に すべての必要を満たす あふれるばかりの恩寵 さらに深い信仰と新しい力を 彼が与えて下さるといふことを」。私たちも、このように神様の御前に出て行き、祈ることによって、神様の愛と恵みを体験したいと思います。

イエスは十字架の道を進む前に、ご自分や弟子たちのために祈られました。このイエスの祈りは、内容的に三つに分かれています。今日は、最後の部分の「すべての信仰者及び教会のための祈り」について、お話したいと思います。

聖書の箇所は、ヨハネ福音書17：20～26です。

I. 一つになる

▽イエスは十字架を前にして、まず自分自身のために祈られました。第二に、弟子たちのために神様の守りと導きがあるように祈られました。それからイエスの祈りは、一步未来へと前進し、地の果てに向かっていきます。ヨハネ17：20「彼らのことばによってわたしを信じる人々」のために、イエスは神様に祈られます。「彼らのことば」、つまり弟子たちの宣教によって「イエスを信じる人々」が、将来にわたって起こされ、しかもその人々が全世界に起こされることを見通しておられました。弟子たちから多くの人々がイエスを信じるようになり、教会が生まれ、宣教が歴史的にも、地理的にも拡大することを見ておられました。この祈りは、イエスを信じるすべての人たちのため、その後起こされる教会のための祈りです。イエスはこのことは、神様のみわざであることを確信しておられました。イエスに従う弟子たちが今はわずかでも、今後神様がイエスを信じる人々を起こされるという神様に対する全き信頼と信仰をもっておられました。それとともに、弟子たちの信仰が弱く、すぐにつまずいてしまうこともご存知でした。それでもイエスは、彼らを信頼されました。イエスは、弟子たちがどのような状態でも彼らを信頼しておられました。私たちは、イエスのようにもっと兄弟姉妹を信頼したいものです。それではイエスは、クリスチャンとその集まりである教会に対して、どのような祈りをされたのでしょうか。

▽ヨハネ17：21～23 この箇所で繰り返されている言葉は、「一つ」です。21節「すべての人を一つにしてください」、22節「彼らも一つになる」、23節「彼らが完全に一つ

になる」とあります。イエスは、この前の部分では弟子たちが一つになること、つまり教会の内部の一致について祈られました。しかしここでは、自分が所属している教会の外側のクリスチャンや教会と一つになることを願われました。クリスチャンが一つになること、教会が一つになることを願われました。では、イエスが祈られた一致とは、どのような一致であったのでしょうか。それは、クリスチャンはみな同じように一つの教会を組織することではないはずです。また同じ形態で神様を礼拝するわけでも、教会が同じ教えを守り、しかもそれを細かい所まで一致しなければならないというわけでもありません。現に、歴史の流れを見ますと、いろいろな教会の形態や教えが生まれてきました。古くは、ローマ・カトリック教会とプロテスタント教会、東方教会、聖公会などという教会が生まれました。また日本でもいろいろな教団教派が形成されてきました。戦後生まれてきた教団教派は、宣教師の働きにルーツを持つものがあります。例えば日本ナザレン教団は、アメリカのエコール宣教師を中心として、戦後形成されました。日本福音教会（JEC）はスウェーデン・オレブロ・ミッションが1949年ヤンソン夫妻を最初に派遣したことから始まりました。彼らは、堺市で伝道を開始し、多くの教会を設立しました。1980年代には、「聖霊の第三の波」とか「力の伝道」という信仰の運動がはいつてきました。この流れは、病気のいやしや異言などの聖霊の賜物（カリスマ）を強調し、多くの教会に影響を及ぼしました。いわゆる「ペンテコステ運動（カリスマ運動）」です。これ以外にも、数えられないほどの教会の流れがあり、それに関した教会が生まれてきました。しかし、イエスが祈られた「一致」は、これらの教会が一つの同じ教会になり、ローマ・カトリック教会のように一つの組織を形成することではありません。人には個性があり、様々な考え方や生き方があります。ですから、教会にも個性があってもしかるべきなのです。しかし、イエスが一つになると言われたのは、「愛による一致」です。21節「あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように」とあります。神様とイエスとの一致は、愛による一致であり、従順による一致でした。23節「わたしは彼らのうちにて、あなたはわたしのうちにおられます」とも言われました。そして、23節「わたしを愛されたように彼らも愛されたこと」ともあります。イエスが祈られたのは、神様を愛するがゆえに愛し合う一致です。神様は、すべての人を愛しておられますので、私たちも神様が愛されているすべての教会を愛します。自分たちだけが正しい信仰という所に立ちません。たとえ、違う形式の教会も、また違う教えを主張する人をも受け入れ、愛することによって一つになります。教会は、一つのからだ、一つの群れ、一つの宮です。キリストをかしらとし、キリストにつながることによって一つとなります。夫婦や家族の場合、違いがあったとしても愛によって一つの家族です。私たちは、兄弟姉妹に対して、心の壁や悪い感情を持っていないかもしれませんが、それだけでは十分ではありません。イエスは兄弟姉妹と心において一つとなることを願っておられます。兄弟姉妹と心をつなげて祈る「祈りの友」となりたいものです。祈りは、私たちの心を主にあつて一つにしてくれます。マザー・テレサは、次のように言っておられます。「その人がヒンズー教徒であれ、イスラム教徒であれ、キリスト教徒であれ、どのように生きてきたのかが、その人の人生がまったく神様のものであるかどうかを証明します。私たちは、非難したり、人々を傷つけるような言葉を言ったりすることはできません。私たちは、神様がどのようなやり方で、その魂に現われ、ご自分の方へ引き寄せられるかわからないのですから」と。私たちは、このような神様の愛の視点をもって、人々に接したいものです。愛は、決して非難したり、傷つけることはしません。差別したり、自由を奪ったりもしません。神様がどのように働かれるのかわからないからです。

ヨハネ17：21「世が信じるようになるためです」。私たちが愛し合って、一つになっているならば、そこにイエスがおられることが世の人々、つまりイエスを信じていない人々のあかしになります。福音を言葉で伝えることも大事ですが、愛によってクリスチャンが一致していることがイエスをあかしすることになります。日常生活を通して、イエスの救いを

お伝えすることができます。あるご夫婦（Mさん）のあかしです。「Mさんは元僧侶です。80歳の時に、クリスチャンになってお寺を捨てられました。Mさんが信仰をもったきっかけは、奥さんの回心です。奥さんは駅前で配られていた特別伝道集会のチラシを見て、生まれてはじめて教会の門をくぐられました。しかし、その時の話はあまりよくわからなかったのですが、彼女の心をとらえて離さなかったのは、その教会にある和だったと言われます。老弱男女、さまざまな人がいるのに、どうしてこれほど仲良くしていただけるか不思議に思われました。そして、続けて教会に通われるようになり、イエスを信じてクリスチャンになりました。お寺の僧侶の奥さんがキリスト教信者になったので、周りは大変でした。ご主人もキリスト信仰を捨てるように奥さんを責め立てられました。そのうち、Mさんも奥さんの中に真の信仰を感じるようになり、ついにMさんもイエスを信じる決断をされました。そしてご夫婦ですべてを捨てて、お寺を出られました。その後、つつましやかな生活をされていました。Mさんの奥さんは、『今が私たちの生涯で最もしあわせな時です』と言われていました。彼らは年を取ってから、信仰を持たれましたが、「しあわせな時」を過ごされました。人生ではいろいろなことがあります。クリスチャンとして生かされていることが「最もしあわせ」であると日々感じ、そのように生きるのはイエスのあかしではないでしょうか。

II. イエスの約束

▽ヨハネ17：24 イエスの祈りの最後は、「イエスの栄光」です。クリスチャンはその栄光を見、その栄光に預かります。イエスの前には、十字架の苦しみが待っていました。しかしその苦しみの先には、人類の救いという栄光が待っていました。「わたしのいるところに、彼らもわたしとともにいるようにしてください」と、イエスは祈られました。私たちはイエスとともにいて、イエスの栄光に預かる者となるというイエスの約束です。イエスを信じる者に与えられる栄光は、何とすばらしいものでしょうか。その栄光は、「世界の基が据えられる前からわたしを愛された」ゆえの栄光でした。それは、神様の愛の栄光でした。ヨハネ17：26「あなたがわたしを愛してくださった愛が彼らのうちにあり、わたしも彼らのうちにいるようにするためです」とあります。神様の愛が私たちのうちにあり、またそれと同時に、イエスが私たちの心の中におられます。イエスが私たちの心のうちにおられるのは、聖霊の働きです。聖霊の働きによって、心の中にイエスの栄光が現わされます。神様の愛に生きるならば、イエスの栄光を垣間見るようになります。マザー・テレサは、次のように言っておられます。「神様はあなたを愛しておられます。神様があなたを愛して下さるように、私たちも互いに愛し合ひましょう。愛とは分かち合うこと、私たちにある最善のものを与えることです。私たちは、神様の愛の運び手です。そして、あなたがだれであれ、あなたも神様の愛の運び手になれるのです。愛する心、生活の純粋さ、深い思いやりの心を通して、神様は、今もいらっしゃるということを世界に証明するのです」と。私たちが神様の愛に生きるならば、一つとなることができます。それは、イエスの栄光です。エペソ2：6「ともに天上に座らせてくださいました」と、聖書は言います。私たちのからだは、この世にいます。私たちがこの世で神様の愛に生きる時、心で天の御国をガラス越しに、おぼろげながら見ているのに過ぎません。しかし、ついに天国で「顔と顔とを合わせて見る」こととなります（Ⅱコリント13：12）。私たちが神様の愛に生き、互いに思いやり、親切にし、互いのために祈るならば、やがて私たちはイエスの十字架に現わされた神様の愛を完全にみることができるようでしょう。またこの地上で苦しむならば、やがてイエスの十字架の苦しみの栄光に預かれるでしょう。このことはイエスの約束であり、私たちの希望です。イエスは、この祈りを終えた時から、裏切りの試練と十字架の苦しみに向かってまっすぐに進まれました。イエスはこれ以上弟子たちに語ろうとはされませんでした。イエスの最後の祈りが栄光であることは、とてもすばらしく、尊いことです。しかもその栄光は、永遠のものです。私たちは、このイエスの祈りを覚え、神様の愛に生きましょう。